

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25年 6月 12日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2010 ~ 2012

課題番号：22530812

研究課題名（和文） 教員養成課程学生の学びの過程を解明する手法に関する教育臨床的研究

研究課題名（英文） Clinical education study on method to elucidate a process of the learning of the teacher training course student

研究代表者

宇佐見 香代 (USAMI KAYO)

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：20294275

研究成果の概要（和文）：

本研究は、これを分担する研究者に共有されている教育研究の問題意識・方法論即ち「教育の臨床的研究」が、教員養成及び教師教育の場にどのような構造転換や質的变化をもたらしつつあるのかを検証した研究である。質の高い学びが保障できる教員を育てるためには、教職を志望しつつある学生に質の高い教員養成教育を提供する必要がある。これからの教員養成・教師教育の制度改変の動向を踏まえつつ、これらの議論に資する題材を提供できるようにした。教育臨床学を学ぶ教員養成課程の学生の学びの過程を解明する手法についての実証的研究を行った。

研究成果の概要（英文）

This is the study that inspected whether a critical mind, the methodology of education study shared by a researcher sharing this namely "a clinical study of the education" is bringing what kind of structural conversion and qualitative change in the place of a teacher training and the teacher education. We studied substantially on method to elucidate a process of the learning of the student of the teacher training course to learn education clinical study

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育臨床的研究 教員養成 教師教育

1. 研究開始当初の背景

本研究の分担者は埼玉大学教育学部の学校教育臨床講座のスタッフを中心に構成されている。1999年にこの講座が新設された背景には、従来の教育学研究が、教育実践と教育研究の有機的連関とその構造を十分に明らかにしつつ行われてきたのか、といった問題意識があった。新設当初より「臨床」を学校の実践と大学の研究のあいだの往還という比較的広い意味合いにとりながら、それぞれの専門領域を生かした多様なアプローチを試みてきた。それらの成果は、これまでも大学の講義や演習および講座の研究紀要（『教育臨床研究』）等に反映させてきている。それぞれのスタッフが何らかの仕方です学校現場との接点を持ち、教室の具体的な文脈に関与しつつ、教育実践上のさまざまな困難とその克服を見据えた教育研究を志向してきた。講座創設から10年たった現在、これまでの成果を整理しながら、教育の臨床的研究にどのようなアプローチの広がりがあり、それらの研究が教員養成および教師教育の場とのあいだにどのような構造転換や質的变化をもたらすものなのかという検証を行う段階に入っていると考えていた。

一方、「質の高い教員の養成」を目指す一連の制度改革の過程で、平成22年度入学者より「教職実践演習」が必修科目として設定されると同時に、「履修カルテ」によってそれまでの教員養成教育における学びの履歴を検証しつつその完成を目指すことになった。「教職実践演習」実施上のさまざまな問題点や、「履修カルテ」についての内実についての議論は、実施年度に向けて今後も活発に行われていくと考えた。さらに、さまざまな報道によると、当時の民主党政権下の教育政策においては、教育実習を長期化し、教員養成課程そのものを6年に延長するなど、かつて無いほど劇的な変化をもたらす制度改革の方向性が取りざたされていた。本研究では、当然それらの動向も注視しつつ、教育の臨床的研究の成果及びその方法が、さまざまな困難に日々直面する教育現場でその問題の克服に貢献しすべての教室やすべての子どもに質の高い教育を保障することに近づくことを実証していくことを目指した。このことは、既述の「質の高い教員の養成」に関する議論に資する題材を提供することになると考えた。

2. 研究の目的

質の高い教員養成は、当然ながら子どもたちに質の高い学びを保障することを目指して行われる。そのような学びを保障する教師自身が、「質の高い学び」を十分理解し十分体験したところで教師になることが必要不可欠である。教育の専門職は、豊かな学びを創出するのに必要な専門的な知識技能（教育内容及び教育方法等）の習得を前提とし、そのような専門的な知識技能が生きて働くように活用されている教育実践の現場の事実から体験的に学ぶ機会が保障される必要がある。と同時に、さまざま困難を抱える教育現場の課題の克服のために、これらの事実を批判的反省的に検証しつつ、新たな教育的知見を探究しよりよい実践を創出する資質や力量を持たなければならない。教室の具体的な文脈に関与すると明らかなのは、教育実践においては、あらかじめ準備されたプログラムの遂行といった要素は勿論存在するものの、実際の教室の出来事は「偶然性」「一回性」に満ちており、その場でその意味を丹念に読み解き臨機に手だてを講ずることができる資質能力が要求される。本研究の課題は、教員養成段階でこのような資質能力を育てる効果的な手だてとその評価をいかに構築していくべきかを明らかにするというところにあった。

臨床教育学を専門とする私たちの共有する問題意識として、従来の「達成すべきスタンダード」の策定とそれに沿った評価といった手法だけでは、変化が激しく問題が山積する学校現場の状況に対応できる、反省的実践者としての教員を育てることは難しいと考えた。本研究では、教育臨床の研究分野、すなわち学校現場と大学とを往還的に結び研究教育を行う立場から、教員養成課程学生の学びの過程を解明する手法に関する研究を行い、「達成すべきスタンダード」だけでは捉えきれない教師としての成長のプロセスを解明していくことを目的とした。

3. 研究の方法

教職専門性についての教育臨床学分野の見地から、より実際的な学校現場との関わりをもち、多様な視点から現場の問題を捉え問題解決できる力に関して、具体的な指導内容

やその評価方法を模索することとした。そのために、学生が研究者と共に研究フィールド及び学習支援・教育実践先である学校現場と大学を往還的に結ぶ活動の中で、意味を感じたり、価値あることとして学んだことを表現し、その学びの過程を、文字記録・ビデオポートフォリオなど手軽で継続して利用できる記録方法によって記録を積み重ね、その記録を用いた自己及び相互の振り返りを経た評価方法について検討した。

4. 研究成果

まずは、研究担当者が、授業の映像記録や実践記録など、授業の記録を使った教育実践研究の意義について、研究者それぞれの研究の観点を提示した。その際、授業や教育の現場を多様な視点から捉えるためのアプローチについて明らかにしつつ、それらの成果を授業などで学生に還元した。これらの学ばれ方は、従来の座学だけではなく、ワークショップ、参加型授業、授業参観、学習支援活動など、学生自らが活動する学びの場を多用した。

研究者が授業で提示した教育臨床的研究の成果の一例として、岩川「私とあなたと私たち―『粘土と鋳型』から『編み目と編み物』へ―」や、八木「『基礎』のゆくえ」、船橋「戦後新教育とコア・カリキュラム」などがある。また、宇佐見は研究年度内に、フィールドワーク体験学習で学ばれることについて分析を加え、従来の座学では得難い学習の意義をどう捉え、どう高めるのかについて考察を加えた研究を行った。いずれも実際の授業場面を対象にし、教育の具体的な文脈に即して、授業の構成・内容を分析し、従来の教育方法学的手法では欠落した視点を持って教育の実際を捉えようとしたものである。以上の研究の過程を学生と共有すること、さらに成果を学生に提供することを通じて、学生の中にどのような探究の筋道がつくられていくのか、その過程を描き出す作業を重ねた。

また、教師教育研究の成果としては、現代の埼玉県の教員養成・教師教育の現状と、担当する科目「教師の成長と教師教育」における教育内容について述べたものに、宇佐見「教師を育てる・教師が育つ」がある。野村は、教員養成における学生の学習環境を検討し、それを補う資料・データベースの構築を試みた。障子は、学びにおける教師の身体の有り様についての一貫した研究をこの間行ってきた。この他、学生の学びの過程を明らかにするために、学生の参加型授業の記録を蓄積し、それらの分析を進めたが、この分析を研究者全員で行う作業の遅れがあり、研究年度内のとりまとめができなかったのが大きな反省である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

1. 八木正一「音楽科における異文化理解実践の系譜と課題」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』12、2013、15-22

2. 中村麻由子・庄司康生「意味が編み直されるといふこと ―まなざしと声の内面化に着目して―」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』11、2012、31-38

3. 八木正一・川村有美「音楽科における授業モデルに関する一考察」『埼玉大学教育学部紀要(教育科学)』61-1、2012、121-130

4. 山本真紀・八木正一「音楽科における鑑賞の授業構成に関する一考察 ―範例方式を視点として―」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』11、2012、137-144

5. 宇佐見香代「教師を育てる・教師が育つ」『学習研究連盟・研究活動の集録』37、2011、10-13

6. 岩川直樹「私とあなたと私たち ―『粘土と鋳型』から『編み目と編み物』へ―」『現代と保育』77、2010、6-16

7. 八木正一「基礎の行方」『音楽文化の創造』56、2010、18-21

〔学会発表〕(計3件)

1. 宇佐見香代「『奈良さんぽ』学習(奈良女小・谷岡義高教諭)にみるフィールドワーク体験学習の意義 ―自律的な学習における探究の豊かさについて考える―」日本教育方法学会、2012年10月7日、福井大学

2. 野村泰郎「履修カルテを補う教員養成課程での学びと教職とを結ぶ学習支援環境の検討～教職課程科目内容と関連づけた教員採用試験過去問題データベースの開発～」日本教育工学会、2012年9月15日、長崎大学

3. 宇佐見香代「フィールドワーク体験で子どもは何を学んでいるのか ―『見る』と『書く』の間―」日本生活科・総合的な学習教育学会、2011年6月18日、岐阜聖徳大学

〔図書〕（計3件）

1. 船橋一男「戦後新教育とコア・カリキュラム —教育における「戦後啓蒙」の試みと挫折」『近代日本の人間形成と学校 —その系譜をたどる』（木村元 編著）クレス出版 2013. 3（148-161）

2. 田中健次・八木正一『クイズ教材でたのしむ日本音楽の授業』学事出版、2011、32

3. 庄司康生「教室=学びの場における教師の身体-わかること=子どもの文化への誕生を迎えるために」『教師の言葉とコミュニケーション』（秋田喜代美編）教育開発研究所、208（2010）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宇佐見 香代 (USAMI KAYO)
埼玉大学・教育学部・准教授
研究者番号：20294275

(2) 研究分担者

八木 正一 (YAGI SYOICHI)
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：70117026

岩川 直樹 (IWAKAWA NAOKI)
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：70251139

庄司 康生 (SYOJI YASUO)
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：20216162

船橋 一男 (FUNABASHI KAZUO)
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号：80282416

野村 泰朗 (NOMURA TAIRO)
埼玉大学・教育学部・准教授
研究者番号：30312911